

井上房一郎と山本鼎の出会い ―軽井沢・星野温泉の別荘―

渡辺 恭伸

2012.3.25 第1版

2013.4.02 第6版

* [15]を追加し、[参考文献]など関連箇所を一部修正した。(2013.4.2)

- 1 概要
- 2 井上房一郎と山本鼎の関係及び星野温泉の別荘に関する記述
- 3 軽井沢高原文庫「文士と宿 軽井沢」展―別荘の所在が明らかになる
- 4 三溪園
- 5 石井河岸菊池記念歴史館
- 6 さくら市ミュージアム荒井寛方記念館
- 7 グラント将軍来日時記録
- 8 『洋画家南薫造 交友関係の研究』―新たにわかった別荘居住者
- 9 内村鑑三記念文庫
- 10 山本鼎の別荘に関する現段階の結論・今後の可能性
- 11 井上房一郎の別荘
- 12 井上房一郎と山本鼎
- 13 補足1―軽井沢の別荘建築など
- 14 補足2―田端文士村
- 15 補足3―詩人・山本太郎(山本鼎の長男)の記述

1 概要

群馬県高崎市の実業家、井上房一郎は、美術、音楽、歴史研究など、文化振興に大きな役割を果たした。群馬音楽センター、群馬県立近代美術館、高崎哲学堂などの建築に今も目にみえる成果を印しているほか、有能なアーティストや学者を見いだして世にだしてもきた。その活動の恩恵は、高崎市や群馬県にとどまらず、波及効果まで考えれば全国に及んでいる。

井上房一郎がそのように文化への関心をもつことに大きな影響を与えたのは信州の画家、山本鼎であった。

2人の接点は、軽井沢の星野温泉に双方の別荘が隣り合っていたことによる。群馬県立近代美術館と高崎市美術館で、「パトロンと芸術家―井上房一郎の世界―」という展覧会が、1998.9/19-11/3に開催されて以来、僕はその足跡をたどってきたが、そもそもの発端の別荘がどこあるのか、現存するのか、なかなかわからずにいたが、最近になって手がかりが次々にでてきて、概略はわかった。

2つの別荘について、判明していることを整理すると、以下のとおりである。

I 山本鼎の別荘

- ・ 富岡製糸場の工場長、大久保佐一が建てて、おそらく1918年に、山本鼎に別荘兼アトリエとして提供した。(ほかに1919年、1920年という説がある。)
- ・ 資料によっては、大久保が山本に贈ったと記されているが、所有権を贈与したものではなく、別荘とアトリエとして使わせたものと考えられる。
- ・ その後、内村鑑三が使った。(入居時期は不明で、1930年に亡くなるまで)
- ・ その後、荒井寛方と南薫造が東西1/2ずつ使った時期がある。
荒井寛方の入居は1933年から。
南薫造は1934年の夏を過ごし、軽井沢が気に入って翌年には別に新築した。
荒井寛方の退居時期は不明だが、現在は別な所有者になっている。
- ・ 建物は、山本鼎が使った当時のものが現存している。
- ・ 原富太郎所有の三溪園にあったグラント将軍(元アメリカ大統領)ゆかりの洋館を星野温泉に移築したものという説があるが、確認できない。

II 井上房一郎の別荘

今は井上家から離れて、高崎市の文具会社経営者の所有となり、建て替わっていて、井上房一郎と山本鼎が隣り合っていた頃のものも現存しない。

経過をたどる形で、以上のことを述べる。

2 井上房一郎と山本鼎の関係及び星野温泉の別荘に関する記述

井上房一郎と山本鼎の出会いは、軽井沢に井上家の別荘があり、その隣に山本鼎がアトリエとして使うよう別荘が建てられたことによる。

『私の美と哲学』井上房一郎 あさを社 1985

「私は、若き日、パリから帰られた山本（鼎）先生の自由画教育のお手伝いをし、やがてその縁で、先生は私にパリ留学を薦め、何かとお世話下さいました。先生は私を足立源一郎さんなどがフランスに渡られる船に託し、パリでは先にフランスに渡りフランス人を妻君にしていた小山敬三さんに、私を託してくれました。そのご厚情が、私の思想形成の基礎を形作った程です。」(p33)

『井上房一郎論序説』熊倉浩靖 「パトロンと芸術家」群馬県立近代美術館・高崎市立美術館 1998 所収

「星野温泉にある井上家の別荘のすぐ近くに山本鼎のアトリエができたからである。房一郎 21 歳、山本鼎 37 歳のことであった。山本のアトリエは、当時原合名会社富岡製糸場長だった大久保佐一から贈られたものだが、その縁故で、母・戸ウの実家青木家縁続きの富岡町長古澤小三郎の肖像を山本が描いたことも、房一郎との縁を深めたものと見られる。」(p8)

* 井上房一郎は 1898 年 5 月生まれだから、1919 年のことになる
巻末の年表にも、1919 年の項に、このころ山本鼎の別荘ができ、知遇をえたところがある。

『夜あけの星 自由大学／自由画／農民美術を築いた人たち』小崎軍司 造形社 1975

「山本は前年(=1918 年)夏、軽井沢の星野温泉で『温泉路』の仕上げに励んでいたとき知りあった群馬県富岡製糸場の長久保場長に気に入られ、星野に山荘を建ててもらった。」(p51)

『夢多き先覚の画家－山本鼎評伝』小崎軍司 信濃路 1979

(1917(t6)の記述)

「『油画の描き方』がアルスから出たのは八月の十三日だが、七月には原稿料の一部を受取って借金を返し、星野温泉に滞在して五十号の『温泉路』を描いた。炎天下にイーゼルを立てて制作している鼎の傍を通りかかったひとりの紳士が声をかけた。富岡製糸場の場長の長久保佐一で、星野に滞在中の日本画家の頒布会にきたが、その画家は酒に酔い、芸者遊びが日課の生活をしており、画は遊びの合間に描いて高価で売っているのを知って呆れて出てきてしまったと話した。二言三言話しているうちに、大久保は、星野温泉地内にアトリエを建てて鼎に提供しようと約束した。」(p94)

(1918(t7)の記述)

「帰京するとまもなく妻を伴って房総半島の海岸に出かけるが、やがて大久保佐一から星野温泉地内のアトリエが贈られたので七月下旬から九月上旬にかけてはそこで滞在した。油絵『夏の山』二点はこの時の制作だし、『温泉路』も仕上げ、(後略)」(p96)

(年譜の記述)

1918 夏、軽井沢星野温泉にアトリエできる。(p260)

『鼎と槐多』 窪島誠一郎 信濃毎日新聞社 1999

(1916 の記述)

「星野温泉に五十号の『温泉路』を描くから買ってくれないかと売りこんだり（けっきょくそれは未完に終わってしまったが）、そこで知り合った富岡製糸工場の大久保佐一という工場長に小品を買ってもらったり、文字通り八面六臂の大忙しだった。」(p213)

(1917.10 以後のこととして) (p137)

「そのうち、軽井沢で出会った富岡製糸工場の工場長大久保佐一が手紙をよこし、星野温泉に鼎のためにアトリエを建てたのでぜひ使ってほしいという。大久保は絵描きとしてだけでなく、鼎が大屋で起こしつつある美術運動にも大いに興味をしめしているようだった。仕事をするのには東京のせまい家では不自由だろうし、大屋の父親の医院でも大きな作品の制作はムリだ。それなら環境のいい星野温泉でゆっくり湯にでも浸かりながら絵を描き、その資金を運動にまわしたらどうだという大久保の進言だった。電気代、水道代を少々払ってくれば、あとはアトリエを好きに使ってくれていいのだという。鼎は二つ返事で大久保のすすめにしたがうことにし、その年の秋ぐちからずっと星野温泉に逗留して制作にはげんだ。(p237)

星野温泉の別荘について、熊倉浩靖、小崎軍司両氏とも「贈る」と書かれている。ただし、その後内村鑑三らに使用または所有が移っていくこと、その後2つに分割して所有されるほどの広さがあったことからすると、「アトリエとして使っている」と便宜を与えられたと推測できる。

窪島誠一郎氏の文章には「電気代、水道代を少々払ってくれば、あとはアトリエを好きに使ってくれていい」と詳細に書かれていて、こらなら贈与でなく、使用の便宜ということがはっきりするが、根拠が定かではない。

大久保佐一から山本鼎に別荘が提供された年は、1918年か1919年だが、確定的な証拠がない。

『山本鼎の手紙』山越脩蔵編 上田市教育委員会 1971

(1919.7/18 の木下茂男あて封書)

昨年も七月から九月の初旬までは、沓掛在で制作三昧に暮しましたが、本年も其予定で七月一日には東京と出発する考へのがいろいろな事件に拘束されて今日に及んで居りますのです。(中略)

御手紙は八月二五日までは、

[信越線沓掛駅在 星野温泉 にて 山本 鼎] で下さいまし。(p151)

この手紙によれば、昨年、つまり1918年には星野温泉に滞在して制作していたことがわかる。必ずしも大久保佐一から用意されたアトリエとは限らないが、制作三昧に暮らすとか、去年に引き続いて今年もという言い方から、自分専用のアトリエというニュアンスが感じられ、1918年から大久保佐一による別荘兼アトリエを使っていたと判断していいように思える。

3 軽井沢高原文庫「文士と宿 軽井沢」展
—別荘の所在が明らかになる

<http://www.karuizawataliesin.com/>

2010年の夏、軽井沢高原文庫で「文士と宿 軽井沢」展が開催された。

その展示に、

「1920年ころ、富岡の実業家・大久保佐一が原富太郎所有の三溪園にあったグラント将軍ゆかりの洋館を星野に移築、山本鼎に提供」

という解説文があった。僕は初めてこの別荘の件に、グラント将軍が関わることもあるらしいことを知った。

展覧会にあわせて、9/3には、「おじいちゃん二代目星野嘉助を語る」という対談があった。

今、星野リゾートを展開する、星野嘉助の孫の星野佳路氏と、その軽井沢での幼なじみで女優の矢代朝子さんが対談された。

そのなかで、

「星野嘉助は内村鑑三に大きな精神的感化を受けたのだが、その内村はグラント将軍ゆかりの家に暮らしていた」

という矢代朝子さんの発言があり、また驚かされた。

対談のあとで、解説文にあった「山本鼎に提供された洋館」と、対談ででた「内村鑑三のグラント将軍ゆかりの家」は、同じものか、また現存しているか尋ねた。

星野佳路氏より年長で、やはり星野一族のお一人の星野裕一氏から、

「それは同じもので、山本鼎、内村鑑三、荒井寛方の順に使った。今もその別荘はあり、使われている」

と教えられた。

別荘の場所も教えていただき、対談の終了後に行ってみると、確かにあった。

長く謎だった別荘に位置がわかり、現存しているものも見ることができた。

僕にとっては井上房一郎と山本鼎の接点としての別荘が確認できたので、それでいいのだが、グラント将軍と、三溪園から移築というのが新たに気になった。

そこで、星野温泉の経営者が書いた本を取り寄せると、こういう記述があった。

『やまぼうし 星野温泉のあゆみ』 星野嘉助 (株)星野温泉 1972

「大正九年 1920 の夏、にせ赤い鳥事件が縁となって、鈴木三重吉氏は家族と共に星野温泉へ来られた。当時、「赤い鳥」は「金の星」と共に、教育雑誌の先端を行くもので、作曲家・弘田竜太郎、詩人・北原白秋、画家・山本鼎などの諸氏が関係していた。わが国の農民芸術運動の創始者、山本鼎氏は、フランスから帰国したばかりの新進洋画家で、自由画教育を唱え、文部省の指導要領である模倣画教育では児童の芽を伸ばすことが出来ないといっ、自由画教育の必要性を唱えて画壇で活躍を開始していた時代であった。山本鼎氏を高く評価する大久保佐一氏は、群馬県富岡に製糸工場を営む実業家で、横浜の貿易商・原富太郎氏が所有する三溪園にあった洋館を、星野温泉地内に移築して、山本先生の画室に提供したものであった。そもそもこの洋館は、明治十七年 1884 に招かれて訪日された、第八代アメリカ大統領であったグラント将軍を接待するために、建てられたものであった。」(「星野温泉のあゆみ」 p10)

「たまたま十二号別荘は、その昔横浜の原富太郎氏が、三溪園にグラント将軍を接待するために作った洋館であって、大久保佐一氏が星野温泉に移築したものであることがわかってから、先生(内村鑑三・筆者注)は十二号別荘をグラント将軍の家と呼び、五号別荘は旅館の近くにあったことなどから、十二号別荘に移り住み、昭和五年 1930 年三月二十八日、天に召されるまでの毎夏を、この別荘ですごされた。」(「内村鑑三先生の思い出」 p38)

1920 三溪園より洋館移築

1921 芸術自由教育講習会開催(「星野温泉年表」(p101))

この本では大久保佐一から山本鼎に別荘が提供されたのは 1920 年とされている。ただし、「大正九年 1920 の夏、」に始まる文章が根拠とすれば、たまたまそれに続いて山本鼎の説明があるにしても、画室が提供されたのが同じ 1920 年のこととは限定できない。

僕は、大久保佐一から山本鼎にアトリエが提供されたのは、前述のとおり 1918 年が妥当と考えるが、いずれにしても確定的な根拠はない。

後段に原三溪(本名原富太郎 1868-1939)が「グラント将軍を接待するために作った洋館」とあるが、グラント将軍が来日した 1879 年には原三溪は 11 歳くらいで、原三溪がコレクションを集めた三溪園も当然存在していなかった。それにしても、三溪園から何らかの経緯で建物が移築されたことはあり得る。

4 三溪園

三溪園に電話で問い合わせると、以下の回答をえた。

「グラント将軍は日本滞在中に日光に行き、大嶮(おおしま)商舎に立ち寄っている。その大嶮商舎から三溪園に 3 つの建物が移築されていることは確認できるが、すべ

て現存しないし、洋館ではない。

ただし、洋館が移築されたという記録はないが、部材だけ運んだあと他に転用して使ったことは、他にもそういう例があり、可能性はありうる。」

大嶮商舎は、東京日本橋の豪商・川村迂叟(かわむらうそう 1822-1885)が 1871 年宇都宮に洋式機械を導入して興した製糸工場で、1872 年創業の富岡製糸場より早い先駆的な製糸場だった。

原富太郎の原合名会社は、1902 年、富岡製糸場の譲渡を受け、あわせて大嶮商舎も引き受け、これに伴って大嶮商舎にあった 3 つの建築が三溪園に移築された。

『三溪園と原富太郎』鈴木博之 「建築の遺伝子」王国社 2007 所収

「やがてここ本牧三之谷の地に、彼 (=原富太郎、筆者注)はつぎつぎに由緒ある建物を移築してゆく。

最初の契機として指摘されるのが、原合名会社製糸部が明治三十五年九月十三日、栃木県宇都宮の鬼怒川沿いの在(河内郡石井村・現宇都宮市)にあった大嶮製糸所を三井家から入手し、その敷地内にあった待春軒、寒月庵、皇大神宮を本牧三之谷に移築したことである。これらの建物は何れも現存しない。(中略)

待春軒は付近の豪農の家を移築していたものといわれ、明治十二年に来日中のアメリカ人グラント将軍が日光訪問の途上、ここで昼食を取ったといわれる由緒をもつ。(p159)

『原三溪翁伝』藤本實也著 三溪園保勝会・横浜市芸術文化振興財団編 思文閣出版 2009

「神殿

此神殿は明治十年の頃故河村迂叟翁か栃木県大嶮製糸場内に建造せられしものにして(中略)星霜の推移故あって該工場は余か有に帰するに至れり余は別に場内に神殿を新構し此神殿を当園に遷(うつ)し以て翁か敬神の念に厚かりしと其の殖産興業に率先尽瘁(じんすい)せられたるの偉蹟を此神殿の記念として永く世上に宣揚せんことを冀(こいねが)ふ

寒月庵

園の右方寒月庵と号する茶室も河村迂叟翁か江戸の本邸より大嶮工場内に移せしものにして元禄の頃義士大石良雄か好て屢々来遊せしことありとて名高し

当時河村家は赤穂藩の御出入りなりしと云ふ

待春軒

待春軒も亦河村迂叟翁か近傍郷土の家を大嶮工場内に移して住宅となせしものにして三百余年前の建築なりと伝ふ明治十二年米国「グラント将軍」本邦へ来遊せられ日光廟遊覧の途次同工場を訪問せられし際此の家にて昼餐(ちゅうさん)を供したりと伝ふ(p398)

翁が洋式洋風を好まないで只その長所のみを採って本格的に日本主義を以て目標とせるは服装住宅の日常生活様式に見て肯(うなず)かれる処であるが、その建築上に於ける好尚は純日本式を喜び、古雅幽趣を貴び、別荘を建てても皆田舎家を購ひ求めてその煤(すす)光りのする古色蒼然(そうぜん)たるものを愛好する。」(p625) (他の資料では、一般的に川村迂叟、大嶮商舎と表記されているが、『原三溪翁伝』では河村迂叟、大嶮商社と表記されている。)

『季刊誌 横濱 vol.30 三溪園 名園の魅力と原三溪をめぐる人々』(神奈川新聞社 2010)

上記の文章にある「神殿」「寒月庵」「待春軒」の写真が掲載されている。

和風の建築で、当然のこととして、軽井沢に残る山本鼎の別荘とはまったくスタイルが違う。

『原三溪翁伝』には、原三溪が和風を好み、別荘を建てても古く田舎びたものを愛したとある。仮に大嶮商舎に洋館があったとしても移築はしなかったろうが、部材だけ運んだ可能性がなくはない。

神社は戦災で失われる。待春軒は戦後に焼失。

寒月庵は熱海市伊豆山の旅館、桃李境にさらに移築されたが、桃李境は廃業し、跡

地に会員制リゾートホテル「東急ハーヴェスト クラブ熱海伊豆山&VIALA」が作られ、2011年7月から会員募集が始まっている。

『横浜・中区史』中区制50周年記念事業実行委員会 1985

1000ページをこえる分厚い本で、「グラント將軍来日」という項目があるが、1ページの1/4ほど、段落2つだけ。

1879年、グラントが横浜に来た、貿易の大得意先アメリカの元大統領を町をあげて歓迎した、という簡単な内容で、「ゆかりの建物」の手がかりはない。

5 石井河岸菊池記念歴史館

<http://www5.hp-ez.com/hp/ishiikasi/top>

大嶮商舎は官営の富岡製糸場設立の前年の1871年にできた私営の製糸場で、宇都宮市の東方、鬼怒川の近くにある。

石井河岸菊池記念歴史館は、鬼怒川の水運基地の1つの石井河岸の記録を保存・研究・公開していて、近くにあった大嶮商舎も検証の対象としている。

記念館に伺い、菊池芳夫館長に話を伺ったが、ここにはグラント將軍の大嶮商舎訪問に直接関わる資料はなかった。

『ものづくりにかけた先人の想いー栃木の近代産業と交通の発達』(栃木県立文書館2007)に、大嶮商舎の場内配置図があるのを見せていただいた。

もとは『宇都宮市史 第8巻』にある資料が転載されている。

でもこれは簡単な配置図で、神社や待春軒がどこにあったかさえ記されていない。これ以上、大嶮商舎ー三溪園ー軽井沢の関係をたどることはできないようだ。

それはそれとして、僕にはそもそもグラント將軍が日光に行ったときに大嶮商舎に寄ったことが不思議だった。ここは宇都宮市街から東に5キロほど離れているし、今の交通事情からすると、JR東北線からも旧・国道4号からもそれている。

グラント將軍の来日は1879年で、1885年に開通する鉄道はまだないから、鉄道を基準に考えるのは理に合わないとしても、旧・日光街道からにしても、わざわざ遠回りしたように見える。

歴史館の菊池芳夫館長に教えていただいたのは、この歴史館の前の道は、もと水戸街道で、石井河岸を経て笠間から水戸へ行く重要な道だったとのこと。

今は田園地帯をゆるやかに通っている、ふつうの道のひとつにしか見えないし、しかも歴史館のすぐ先で鬼怒川の土手に突き当たっている。

でも、かつてそこにあった石井河岸は、宇都宮方面からの荷がここで集結し、船で江戸に運ばれる重要な物流拠点でもあったから、わざわざ遠回りという感覚ではなかったようだ。

歴史館は菊池家の中の蔵を使って資料を公開している。

菊池家は、かつては街道に沿って河岸にも近いここで旅籠を営んでいて、屋号を「吉野屋」といった。

江戸末期には菓子も作って売るようになり、広い敷地のうち街道に面した側(今は庭にしている)に売店を設けて繁盛し、それから屋号は「菓子屋」になっているという。

曾祖父がこのあたりの長をされたこともあり、写真を見るとひげを生やして威厳がある。

案内していただいて、鬼怒川左岸(東)に渡り、大嶮商舎の跡地を見に行った。

今は、よくある北関東のありふれた田園風景で、広い畑地に住宅が点在している。水路の曲がり具合がわずかに当時の地形を示しているほかは、大嶮商舎に関わる具体的なものは何も残っていない。電柱や水路など境界にあるものを示して、それらの内側が大嶮商舎だったと説明されるのだが、ブラタモリのCG画像のようにかつての様子を組み立て思い浮かべるしかない。

6 さくら市ミュージアム荒井寛方記念館

<http://www.city.tochigi-sakura.lg.jp/site/sakura-museum/>

軽井沢の山本鼎（1882-1946）がアトリエにした別荘は、のち内村鑑三（1861-1930）、その後荒井寛方（1878-1945）の別荘となった。たまたま石井河岸菊池記念歴史館から北に15kmほど行くと荒井寛方の出身地、旧・氏家町に、その作品を収めたミュージアムがあり、寄ってみた。

荒井寛方と別荘については、荒井寛方記念館が企画展ごとに刊行している図録に年譜の記載がある。

1931 聖徳記念絵画館の壁画制作のため、原三溪の斡旋で群馬の富岡製糸場に赴く
1933 壁画完成 『富岡製糸場行啓図』下図は母校の氏家小に寄贈
" 軽井沢にアトリエを持つ 以降、毎年院展への出品作をこのアトリエで描く

荒井寛方が軽井沢に縁をもつのは、富岡製糸場—原三溪のつながりによることが推測される。

『やまぼうし 星野温泉のあゆみ』（前掲）に、内村鑑三は、「十二号別荘に移り住み、昭和五年1930年三月二十八日、天に召されるまでの毎夏を、この別荘ですごされた。」

とあるから、内村鑑三が1930年に亡くなってから数年して、1933年に荒井寛方が入ったことになる。

この「アトリエを持つ」とあるのが、所有権まで得ていたかどうかは、山本鼎、内村鑑三の例と同様に定かではない。

荒井寛方が書き残したものなどに別荘についてふれていないか、学芸員の方に伺ったが、今確認できる資料にはないとのことだった。

7 グラント将軍来日時の記録

外務省外交史料館蔵『外国人の来朝関係雑件 米国前大統領グラント来遊の件』

元アメリカ大統領を迎えた日本政府側の対応の記録が外務省外交史料館にある。

第19巻までであるが、1,3,4,6が欠けていて、15冊になる。史料館の方が、関東大震災か空襲で欠けたかもしれないと言われる。

1冊ごとが厚く、かなりの量がある。

前にも一度閲覧したが、大量なうえに、「グラント将軍ゆかりの建物がでてくるかもしれない」という漠然とした探し方だったから、全巻にひととおり目を通したが、収穫がなかった。

2回目の閲覧では、大嶮商舎に絞ったので、手がかりがえられた。

第15巻に、グラント将軍が日本滞在中、7月17日から7月31日の行程で日光に行ったときのことが、日本側の随行者の報告文案として綴じてある。

大嶮商舎から、前年アメリカで開催された博覧会に出品し褒賞を受けたので招待したいと申し出があり、グラントがその願いを叶えたと、訪問のいきさつが書かれている。

訪問日は1879年7月29日で、鬼怒川を船で渡るときに鮎漁を眺めたことや、工場に着いてからの歓迎の様子も記されている。

食事について、

「貴客一同川村氏ノ宅ニテ午餐 随員一同ハ皆川村氏ヨリ午飯ヲ供セリ」

とある。

この「川村氏ノ宅」というのが、のちに横浜の三溪園に移築された待春軒のことだろうか。

「貴客」と「随員」で、「午餐」と「午飯」を使い分けているようなのがおもしろい。

第8巻には、日光に行ったときの経費や寄贈品リストが記録されている。

グラント一行には行く先々で寄贈品（おみやげ）があった。馬車や人力車で移動していたのだから、リストにあるものをすべてそのとき受け取って持ち帰ったとすると、運ぶのがたいへんそうだ。

大嶮商舎で寄贈したのは

一 生糸・繭 1箱

- 一 写真 1 箱
 - 一 団扇 8 本
- とある。

大嶮商舎でのもてなしの経費も記してある。

- 一 (上記の)寄贈品の代価 6 円
- 一 日米両国の国旗 11 円
- 一 渡船場の「船子」25 人と、鮎漁の「人足」10 人 6 円
- 一 渡船場から大嶮商舎までの道路修繕 86 円
- 一 饗応の諸費(たぶん食費) 140 円

といったぐあい。(銭以下を省略。原文は旧字体で、金額も漢字)

国旗 2 枚より 35 人の人件費が安いとか、道路修繕 (の程度にもよるが) より饗応の諸費のほうが高いとか、不思議な気がする。

グラント将軍一行は、7 月 29 日に訪れ、午餐をとって、帰館は午後 3 時 30 分とある。このあとどこかに泊まり、31 日に東京に帰り着いている。この「帰館」がどこを意味するか不明だが、大嶮商舎への滞在がそう長い時間ではなかったとは判断できる。わざわざそれだけのために建物を新築することはなさそう。

大嶮商舎からの招待の意思表示と、将軍の承認が、いつのことか定かではないが、家 1 軒建てるほど時間的余裕があったとも思えない。

また、このとき用意した国旗や午餐の経費、道路補修費、みやげの扇などの経費など、詳細に記録されているが、家の建設費は記されていない。

そうしたことから、大嶮商舎がグラント将軍訪問のために洋館を新築したことはないとは判断していいと考える。

『グラント将軍日本訪問記』ジョン・ラッセル・ヤング 宮永孝訳 雄松堂書店 1983

グラント将軍の随行者が書いた記録。

政治向きの関心で書かれていて、旅行記的記述は乏しく、将軍の行く先でこれがゆかりの建物だったかと思えるような文章はない。

それでも日光に行ったときには、こういう文章がある。

「日光で過ごした時ほど楽しいものはなかった。七月二十八日の朝、名残り惜しげに、われわれは寺院の親切な友である管理人に別れを告げた。(中略)町に着くとわれわれは人力車に乗り換え、さらに走り続けた。道は雨のせいでぬかっていた。ここでも兵舎を訪れたが、雷雨にならなかつたら、ここでも観兵式が行なわれるはずであった。

翌朝、われわれは神奈川 Kanagawa に行き、蚕を見物した。その翌日もさらに旅をつづけ、薄ぎたない村で一泊した。村長が応対に出、夕方彼と懇談した。七月三十一日、われわれはくたくたになって、ここちよい宿舎がある延遠館にもどった。」(p129)

「明治十二年七月二十九日、グラント一行は日光からの帰途、絹業を見学するために栃木県河内郡石井村ー鬼怒川縁(ラッセルの訪問記によればカナガナ kanagana とある)の大嶮製糸工場を訪問したが、その折、昼食の饗応を受けた建物が同工場内にあった待春軒である。明治四十二年三月、この建物は原富太郎の手で工場内の神殿・寒月庵(茶室)とともに三溪園に移されたという。

結局、グラント来朝の記念物といっても今も健在なのは、長崎公園と上野公園にある記念樹と碑だけである。」(同書の訳者あとがき p273)

この「蚕を見物した」というのが、鬼怒川の近くにある大嶮商舎のことだろう。(グラントの随行員が鬼怒川を Kanagana と聞き違えるのは仕方ないとして、翻訳の本文では Kanagawa とあらためたうえ「神奈川」の字をあてはめているのが理解しがたい。)

「グラント将軍ゆかりの洋館」については、三溪園にも大嶮商舎にも記録がなく、外

務省外交史料館と随行員の記録でも裏付けるものはない。
今ある資料からは「グラント将軍ゆかりの洋館が三溪園から星野温泉に移築された」ということはいえない。

8 『洋画家南薫造 交友関係の研究』－新たにわかった別荘居住者

2011年暮れ、洋画家、南薫造(1883-1950)に関する本を出版された南八枝子さんからメールをいただいた。

南さんは、南薫造の孫の妻にあたる方で、南薫造の広い交友関係の資料を集め、整理して、出版された。

荒井寛方が星野温泉 12号別荘にいた頃、半分を南薫造が使っていたとのこと。

僕は荒井寛方と同時期に南薫造が使っていたことを知らずにいた。

一方、南さんは、その別荘が山本鼎にアトリエとして使わせるために作られたことを承知されていなくて、僕がその別荘の来歴をたどっていることをホームページに記しているのを見て、連絡してこられた。

僕は、山本鼎の別荘が内村鑑三や荒井寛方につながることに驚いていたのだが、さらに別な画家まで一時期使っていたことを知って、また驚かされた。

『洋画家南薫造 交友関係の研究』南八枝子 杉並けやき出版 2011

「南が昭和9年(1934年)に星野別荘12号の東半分を借りて、家族を伴って9月6日から12までを過ごしたとき、同じ12号の西半分を借りていたのが荒井寛方だった。到着の翌日から親しい行き来が始まっている。荒井は12号西半分を昭和11年(1936年)に購入し、32年まで所有した。南は早くも昭和10年(1935年)に12号の隣接地、星野13号に別荘を新築したが、荒井とは引き続き隣人としての家族ぐるみの交流が続いている。」(p128)

(文中()内の西暦年は筆者が補った)

前述のように、星野温泉に関わりがある星野裕一氏は、山本鼎－内村鑑三－荒井寛方と別荘を使ったといわれていた。

南八枝子さんによると、南薫造は東京美術学校在学中に山本鼎と行き来したことを日記に記している。なのに、その後、山本鼎が使った星野の別荘で過ごしたとき、なぜ日記にその偶然を記さなかったかという疑問を抱かれた。山本鼎が使った別荘と、南薫造が使った別荘は同じものかという疑問につながる。

これについては、南さんが荒井寛方の孫にあたる方に照会し、荒井寛方の別の親族が、以前に山本鼎が住んでいたと語るのを聞いたことがあるという証言を得られている。

9 内村鑑三記念文庫

<http://lib-archive.icu.ac.jp/uchimura/index.html>

「3」に記したとおり『やまぼうし 星野温泉のあゆみ』に、内村鑑三が星野の12号別荘に住んだことが記されている。その前にいた5号別荘は、旅館の座敷に近く、酔った客が騒がしいことなどあって迷惑していた。内村鑑三はグラント将軍を高く評価していて、そのゆかりがあり静かでもある12号別荘に移ったという。

国際基督教大学に内村鑑三記念文庫があり、その資料は「内村鑑三記念文庫 デジタルアーカイブ」としてweb上にも公開されている。

そのなかに軽井沢の別荘で撮った写真が数点あるが、『信州沓掛星野山荘玄関前に立てる内村先生夫妻』には、現存する星野12号別荘の特徴のある玄関が写っている。

山本鼎は、1921年に、星野温泉を会場にして「芸術自由教育夏期講習会」を開催した。手紙でその準備の忙しさを記したあとに、星野に内村鑑三が滞在していることを記している。星野に山本鼎と内村鑑三がともにいた時期があるわけだが、2人に直接何かしらの接触があったかどうかは定かではない。

『山本鼎の手紙』山越脩蔵編 上田市教育委員会 1971

(1921.7/19 木下茂男あて封書)

「そんな風ですから講師の泊る処も窮屈なんです。大久保という人の別荘と、小生の画室とをそれにあてて居るのです。

ですから画を陳列するような処はないのです。僕の画室の壁を、それにあてるより仕方ありません。毎日かけかへてたくさん見せるより仕方ありません。(中略)

星野には内村鑑三氏が滞留して居られます。」(p200)

1 0 山本鼎の別荘に関する現段階の結論・今後の可能性

以上の経過から、「1 概要」に記した結果になる。

山本鼎がアトリエにした別荘がグラント将軍にゆかりのものということは確認できない。

もし「グラント将軍ゆかり」の根拠が、「3」に記した星野嘉助著『やまぼうし 星野温泉のあゆみ』がおもとであるなら、原三溪(富太郎)の年齢と三溪園の発足年からしてありえないから、否定せざるをえない。

それにしても、「原富太郎氏が、三溪園にグラント将軍を接待するために作った洋館」ということは思い違いだとしても、ほかにグラント将軍のゆかりとされる事情があったかもしれないから、完全に無関係とも決めることもできない。

国内のどこかに資料が埋もれているとか、ニューヨークのグラント将軍記念館 General US Grant National Memorial に関連資料があるとかいう可能性がなくはないが、現状では確認できないという結論になる。

あとは、現物の建築が残っているので、様式とか、建材とか、建築的な観点から事情を推定できるかもしれない。

1 1 井上房一郎の別荘

「3 軽井沢高原文庫「文士と宿 軽井沢」展」で記したとおり、井上房一郎の別荘については、星野裕一氏から、山本鼎の別荘とあわせて所在地を教えていただいた。その後、高崎にお住まいで井上房一郎の事績研究をされている塚越透氏から、現在の所有者は高崎の文具会社の経営者であることを教えられた。今は井上家の所有を離れ、建物も建て替えられている。

1 2 井上房一郎と山本鼎

「1 概要」に記したとおり、僕は井上房一郎の足跡をたどっている。

井上房一郎の関心は、美術、音楽、歌舞伎、建築、哲学など多方面にわたっている。

美術館や音楽ホールの創設のような大きな事業を実現するにあたっては、自分のまわりに小さな動きを起し、やがてそれが大きな渦になるように進めて、多くの力を結集して実現することに特徴があった。

山本鼎も多方面に関心があり、農民芸術や児童自由画など、自分の理想に人をまきこみ、運動的に実現していった。

井上房一郎は山本鼎の影響を受けて文化への関心を深め、パリに留学までした。帰国後、2人の現実的接点はほとんどないようだが、井上房一郎は単にきっかけを与えられたのではなく、関心領域の広さ、運動的スタイルという点においても、山本鼎から学んでいるといえる。

2人の別荘のことを調べていると、井上房一郎側の資料では、山本鼎から大きな影響を受けたことが記され、その発端である隣接する別荘のこともふれられる。

これに対して、山本鼎側の資料では、大久保佐一から別荘が提供されたことは記されているが、その別荘が縁となって井上房一郎に影響を与えたことはふれられていない。

のちの井上房一郎の広範な文化的貢献を考えると、山本鼎の存在意義をさらに高めるといっていいもので、山本鼎側からももっと記述があっという

に思う。

1 3 補足1－軽井沢の別荘建築ほか、建築をめぐるつながり

南八枝子さんの『洋画家南薫造 交友関係の研究』には、ほかにも軽井沢の別荘について興味深い記述がある。

南薫造が1935年に山本鼎がアトリエに使った隣に別荘を新築したとき、その設計者は谷口吉郎(1904-1979)だった。

星野温泉内の別荘地なので、その頃は別荘に風呂を作らないのが一般的だった。

今も南家では風呂がないまま使っている数少ない別荘になっているという。

南薫造と親しかった画商の鈴木里一郎(すずきさといちろう 1892-1970)も軽井沢に別荘を持っていたが、現在の鈴木家の別荘は北澤興一氏の設計によるものという。アントニン・レーモンドが設計して夏の間の事務所としていた建築を、レーモンドのもとで働いていた北澤氏がその後購入し、今はやはり夏の間の設計事務所として使っている。その縁で北澤氏は軽井沢でいくつもの別荘を設計している。

井上房一郎はレーモンドと親しかった人だから、井上房一郎－アントニン・レーモンド－北澤興一－鈴木里一郎－南薫造－山本鼎－井上房一郎と線がつながっていく。

南薫造の新宿百人町の自宅は、後藤慶二(1983-1919)の設計による。(現存しない)後藤慶二が亡くなったとき、南薫造は追悼文にこう書いている。

「恐る可き流行性感冒は此の間元気であった我が畏友後藤慶二君の生命をも奪い去ってしまった。」(『洋画家南薫造 交友関係の研究』前掲 p126)

この「恐る可き流行性感冒」はスペイン風邪のことで、山本鼎のいとこの画家、村山槐多も同じ流行性に病気で亡くなっている。

(山本鼎も村山槐多も田端に住んだことがあり、田端については次項に記す。)

1 4 補足2－田端文士村

軽井沢の別荘のことからややそれてしまうが、僕は南八枝子さんとメールをやりとりしているときに南さんからメールにあった「南薫造は東京美術学校在学中に山本鼎と行き来した」ということが気になった。

山本鼎は美術学校時代、田端に住んでいた。もしかすると、この行き来したというのは田端のことではないだろうか？

田端には、かつて板谷波山、芥川龍之介など多くの文化人が住んで、田端文士村といわれている。山本鼎やいとこの画家・村山槐多も田端に暮らした時期がある。

全く私的なことになるが、僕にとっては、両親が新婚生活を始めた地であり、僕も幼い頃、田端の崖から線路がいくつも並ぶ風景を見おろした懐かしい記憶がある。

田端(らしいこと)になるとひっかかるところがあって、南薫造と山本鼎が行き来したのが田端かもしれないという可能性を考えて南八枝子さんに照会すると、やはり田端であると回答をいただいた。

日記に記載があること、美術誌の懸賞に応募して受賞した南薫造の住所として田端が記録されているとのことであった。

『南薫造の中学・美校時代－1900～1904年までの2冊の日記から』藤崎綾 広島県立美術館紀要第12号 2009 所収

1903.1.12(月) (前略) 夕食ヲ終ヘテ同ジ田端ノ近クニ居ル撰科一年ノ山本鼎君ヲ訪フテ二時間バカリ話シテ帰ル 十日アマリノ月ハサヘサヘテ大地ハ冷ク氷テ居ル。帰り佛語ヲ十二時迄調べテ眠ニツイタ。

『美術新報 1巻 22号』(1903(m36).2.5)

一月募集図案審査報告

四等(四人)

北豊島郡瀧ノ川村田端 365 渡邊方南薫造

田端に住んだ文化人の記録を集め公開している機関として、(財)北区文化振興財団田端文士村記念館がある。
ここのホームページにある田端の文化人リストにも、それを地図上に表示したものにも、南薫造は掲載されていない。
上記の資料などから南薫造が田端に居住したことが確認できれば、リストに加えられてもいい人だと考える。

15 補足3 - 詩人・山本太郎(山本鼎の長男)の記述

山本鼎の長男、山本太郎(1925-1988)の著書に別荘に関する記述があった。

『山の彼方の』山本太郎 山と溪谷社 1980

その頃、僕達兄弟は夏の休暇を沓掛(現在の中軽井沢)の山荘で過していた。父の別荘が星野温泉地区にあったのは更に以前の話で、それはとっくに彼の芸術運動の資金と化し、僕達が毎夏すごしたのはグリーン・ホテルの近くの小さな平屋。茶式山荘と呼ばれる貸別荘だった。

ここで「その頃」とあるのは、その前の文章から1936年ころのことになる。山本鼎が54歳ころ、山本太郎が11歳ころになる。

この文章では、星野温泉にあった別荘は芸術運動の資金にするため売られたように書かれている。

山本鼎の星野の別荘について、僕は「2 井上房一郎と山本鼎の関係及び星野温泉の別荘に関する記述」に記したとおり、所有権を贈られたものではなく、使用の便宜を与えられたものと推測している。

山本太郎の文章からは、その見方は否定されることになる。

ただし、山本鼎が星野の別荘を使ったのは山本太郎の幼少時か、生まれる前のことであり、上記の文章当時、山本太郎は11歳ほど、山本鼎が亡くなったときでさえ21歳ころだった。

父から話をきいているか、何かしら贈与であることを示す物があった可能性はあるが、所有していたが資金が必要で手放したというのは、父の事績を知ってからの山本太郎の推測にすぎないかもしれない。

いずれにしても、この文章から所有関係を断定することはできない。

参考文献：

- 『私の美と哲学』井上房一郎 あさを社 1985
『井上房一郎論序説』熊倉浩靖 「パトロンと芸術家」群馬県立近代美術館・高崎市立美術館 1998 所収
『夜あけの星 自由大学／自由画／農民美術を築いた人たち』小崎軍司 造形社
『夢多き先覚の画家－山本鼎評伝』小崎軍司 信濃路 1979
『山本鼎の手紙』山越脩蔵編 上田市教育委員会 1971
『鼎と槐多』窪島誠一郎 信濃毎日新聞社 1999
『やまぼうし 星野温泉のあゆみ』星野嘉助 (株)星野温泉 1972
『三溪園と原富太郎』鈴木博之 「建築の遺伝子」王国社 2007 所収
『原三溪翁伝』藤本實也著 三溪園保勝会・横浜市芸術文化振興財団編 思文閣出版 2009
『季刊誌 横濱 vol.30 三溪園 名園の魅力と原三溪をめぐる人々』(神奈川新聞社 2010)
『横浜・中区史』中区制50周年記念事業実行委員会 1985
『ものづくりにかけた先人の想い－栃木の近代産業と交通の発達』栃木県立文書館 2007
外務省外交史料館蔵『外国人の来朝関係雑件 米前大統領グラント来遊の件』
『グラント将軍日本訪問記』(ジョン・ラッセル・ヤング 宮永孝訳 雄松堂書店 1983)
『洋画家南薫造 交友関係の研究』南八枝子 杉並けやき出版 2011

『南薫造の中学・美校時代－1900～1904年までの2冊の日記から』藤崎綾 広島
県立美術館紀要第12号 2009 所収
『美術新報1巻22号』1903(m36).2.5
『山の彼方の』山本太郎 山と溪谷社 1980

井上房一郎について[山を歩いて美術館へ]

<http://www.mitoho.com/index.html>

井上房一郎と山本鼎の別荘について

[今日は遠くの図書館]の「避暑地の出会い」以下の関連箇所

<http://www.mitoho.com/109/06-ko-sin-etu/naga03-karuizawa.html>

注1 調査どおりの順でなく整理して記しているところがある。

注2 参考文献についてはおおむね該当箇所を原文どおり引用した。

注3 2つの別荘とも現在は山本鼎と井上房一郎の接点ということと直接には関係しない方の所有になっており、詳細な位置や写真は公開しない。

注4 本文中に記したとおり、僕は10年以上にわたり井上房一郎の足跡をたどっているが、この文章は井上房一郎と山本鼎の別荘に関することだけを現段階で整理した。これまでも多くの方に教えられたが、まだ埋もれている事実などがあるかもしれないので、web上に公開することにした。ご教示、ご意見、ご質問などは aoi310@mitoho.com あてお送りください。(@を1つ削除してください。)